

江南市の戦国時代関連史跡

——生活都市と文化遺産観光——

柴 田 昇

1、はじめに

江南市は愛知県西部、尾張地区の北部に位置する、名古屋市のベッドタウンである。1954年6月1日に丹羽郡古知野町・布袋町と葉栗郡宮田町・草井村の四町村が合併してできた人口10万人程度の都市で、現在でも名古屋市など少し離れた地域の住民からは「古知野（この）」として認識されている場合が多い¹。歴史的には、後述する『武功夜話』の発見地であり、多くの戦国武将にゆかりのある土地とされている。

しかし江南市の周辺には、犬山城・明治村など全国的知名度のある観光資源を持つ犬山市、小牧・長久手の戦いで知られる小牧市、尾張地区では名古屋市に次ぐ38万人を超える人口を擁する一宮市などがあり、それらに比べて江南市の知名度は、既に市制施行から50年を越える時間がたっているにもかかわらず決して高いとは言えない。いわば江南市は、規模・施設・観光資源等の面において他に抜きん出た特別な個性を見出しにくい、そこに住む人々の生活空間であることを第一義とする「生活都市」なのである²。

いわゆる三英傑（織田信長・豊臣秀吉・徳川家康）が尾張・三河地区の出身であることの結果として、江戸時代の大名三百諸侯のうち六割近くは現在の愛知県に当たる地域の出身、これを現在の東海四県（愛知・岐阜・三重・静岡）に当たる地域に拡大すると、江戸諸侯の七割以上が東海地区の出身者であるという³。中世から近世への社会変動は、日本全体の身代の総入れ替えとも表現され、信長・秀吉・家康による天下統一事業の推進はその初期より彼らのもとで行動した比較的下層に属する人々の社会的地位の向上という結果を生み出した。そのため尾張地区には著名な武将・大名に深い関わりを持つとされる史跡が数多く存在している。近年愛知県が推進している「武将観光」はそのような歴史的背景に基づくものである⁴。

江南市にも中世末期～近世初期の著名人ゆかりの史跡は存在するが、愛知県内、また東海地区の他の多くの地域と比較した時、現時点での存在感の小ささは否めない⁵。先述したように市そのものの知名度が極端に低い状況ではそれもやむをえない面がある。しかし実際のところ江南市の歴史的文化遺産は、条件付きではあるけれども、現時点での注目度からすれば意外に豊富と言ってよい。本稿では江南市の文化遺産観光資源を中世末～近世初期史跡を中心に概観し、それらの観光資源が持つ固有の問題点及び小規模生活都市において観光資源が持ち得る意味について論及してみたい。

2、江南市の戦国時代史跡

江南市では市内の史跡めぐりコースとして布袋駅を起点とする「信長・生駒（吉乃）コース」と江南駅を起点とする「蜂須賀・曼陀羅寺コース」を設定している。二つのコースの内容

は以下の通り⁶。

「信長・生駒（吉乃）コース」

A 布袋駅→B 廣間家の門→C 富士塚→D 宝頂山墓地→E 般若寺→F 生駒屋敷跡
→G 神明社→H 久昌寺→I 龍神社→J 常観寺→K 経塚→A 布袋駅

「蜂須賀・曼陀羅寺コース」

A 江南駅→B 北野天神社→C 歴史民俗資料館→D 常蓮寺→E 前野家屋敷跡
→F 前野天満社→G 観音寺→H 宮後八幡社→I 蜂須賀家屋敷跡→J 音楽寺
→K 曼陀羅寺→A 江南駅

本章では、この二つのコースに含まれるいくつかの主要な史跡を、現地の案内板や江南市観光協会発行のパンフレットの記述などを参考にしながら概観してゆく。なおとりあげる史跡の順番は上記各コースの順番とは必ずしも一致していない。

2-1、布袋駅周辺史跡

織田信長の妻としては斉藤道三の娘の濃姫がよく知られている。しかし近年の歴史小説などでは信長の側室が重要な人物としてとりあげられることがしばしばある。信長は尾張国丹羽郡小折村（現在の江南市小折周辺）の土豪・生駒家宗の娘を側室とした。『武功夜話』ではその側室の名を「吉乃（吉野）」とし、信長の三子（信忠・信雄・徳姫）が生駒氏の屋敷で生まれたとしている。信長側室の名を「吉乃（吉野）」とするのは『武功夜話』以外ではみられない記事である。

いわゆる生駒屋敷は現在の名鉄布袋駅の南東に存在した。現地案内板はここを「信長や秀吉が、天下制覇への第一歩を踏み出した地」と記す。現在では屋敷自体は残っていないが、布袋東保育園の片隅に記念碑が設置されている（写真1）⁷。布袋駅から北西300メートルほどの地点に現存する廣間家の門（写真2）は、廃藩置県の際に生駒家の典医だった廣間家が生駒家の中門を貰うけて移築したものだという。

『武功夜話』によれば、上総介と呼ばれていたところの織田信長は清須から足繁く生駒屋敷に通った。一般的には秀吉は矢作川の橋の上で蜂須賀小六と出会ったと言われているが、『武功夜話』では秀吉は生駒屋敷を訪れた際に小六の配下になり、さらに吉乃のとりなしで信長に仕

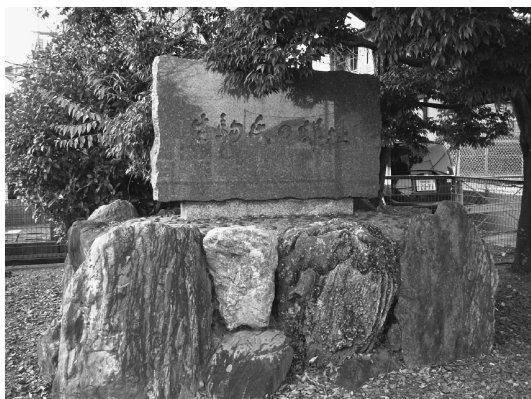


写真1 生駒屋敷跡



写真2 廣間家の門

えることになったと伝えられている。現地案内板は、桶狭間合戦の奇襲や西美濃攻めの戦略が練られたのも生駒屋敷であったことを記している。またこの屋敷は本能寺の変のあと尾張藩主となった織田信雄によって防衛施設を備えた城（小折城）に造りかえられ、さらに江戸時代には生駒氏の別邸としてこの地域における民衆統治の拠点となった。

生駒屋敷跡の西側にはいくつかの関連史跡が点在する。龍神社は生駒氏の氏神として尊崇された神社で、現地案内板には、吉乃の次男・織田信雄の守護神だったと紹介されている（写真3）。龍神社のあたりは、信長と吉乃が逢瀬を楽しんだとされる「吉乃御殿」伝承地である。神社の鳥居から道路をへだてた地点にある力石は、生駒家の家臣にこの石を担がせ力試しをさせて五穀豊穡を祈ったものだという（写真4）。

龍神社から東に200mほどの場所に生駒氏の菩提寺・久昌寺がある。久昌寺は『尾張名所図会』にもその名が見える名刹で、生駒家代々の当主の墓があり、吉乃の墓もある（写真5・6）。また龍神社から西へ400mほど、狭い道を進んでゆくと、田代町・田代墓地がある。ここは吉乃が茶毘にふされた場所とされている（写真7）。墓地内には大河ドラマ『信長』で生駒の方（吉乃）を演じた俳優の高木美保氏によって1992年5月の久昌寺参詣の際に命名されたという「吉乃桜」が立っている（写真8）。



写真3 龍神社



写真4 力石



写真5 久昌寺



写真6 吉乃墓



写真7 吉乃茶毘地（経塚）



写真8 吉乃桜

以上、名鉄布袋駅近辺の戦国時代関連観光ルートは基本的に生駒屋敷を舞台とする吉乃伝承を根拠に組み立てられていると言ってよい。なお布袋駅自体も大正元年（1912）に建設された名鉄最古の駅舎を残す駅として知られていたが、高架に伴う取り壊しで2010年にその役割を終え、新駅舎が建設されている。

2-2、江南駅周辺史跡

続いて名鉄江南駅を起点とするコースに含まれる史跡を概観しよう。江南駅周辺の戦国時代関連史跡には蜂須賀氏に関連するものと前野氏に関連するものがある。江南駅前から一宮犬山線の道路沿いに犬山方面に20分ほど歩くと、右手に空き地があり、その一角に「宮後城跡」との標識がある（写真9）。『武功夜話』には、蜂須賀小六正勝は故あって海東郡蜂須賀邑から丹羽郡の宮後に移り、その子で後に阿波の大名となる蜂須賀家政は宮後で生まれ育ったとある。現地案内板は、宮後に16世紀中頃に蜂須賀小六の住んだ屋敷がありその規模が南北約150



写真9 宮後城跡



写真10 宮後八幡宮



写真 11 前野天満社



写真 12 前野屋敷

m、東西約 120 メートルにも及んでいたことを『武功夜話』を根拠に記している。

宮後城の東側にちいさな森があり、宮後八幡社がある（写真 10）。宮後八幡社は 14 世紀末～15 世紀初頭に勧請されたものを江戸初期に徳島藩主蜂須賀家政が再建したものとされる。またそこからさらに東南方向に移動すると、前野天満社がある（写真 11）。この地域出身の武士たちは出陣の際にはここで必勝祈願を行ったという。

前野天満社の裏手には、『武功夜話』発見地とされる前野家屋敷跡の記念碑が建っている（写真 12）。前野一族からは、秀吉の古参の家臣、前野将右衛門長康が出ている。長康は若いころ蜂須賀小六と義兄弟となり、秀吉配下でしばしば軍功をたて、但馬の大名にまでのしあがった。『武功夜話』は前野長康が秀吉の普請奉行として長浜築城等に関与していたことを伝えている。しかし関白豊臣秀次の後見役となったため、秀次の謀反事件に連座し切腹することになった。近年の小説、加藤廣『信長の棺』・『秀吉の枷』では、「前野軍団」を率いて秀吉の密命を受け奔走する長康の姿が描かれている。前野家屋敷跡の案内板には、この屋敷が長康をはじめとする多くの武将を輩出したことが記されている。

この他に戦国史と関連する史跡としては、江南市市街地北部の前飛保町にある曼陀羅寺が挙げられる。現在の江南市について、観光資源という言葉から愛知県民が第一に思い浮かべるのが曼陀羅寺だろう（写真 13）。

曼陀羅寺は、元徳元年（1329）の創建と伝えられる後醍醐天皇ゆかりの寺で、関ヶ原合戦の際には曼陀羅寺の書院で池田輝政らの軍が軍評定をしたと伝えられている。いったん火災で



写真 13 藤まつりの頃の曼陀羅寺



写真 14 武将行列

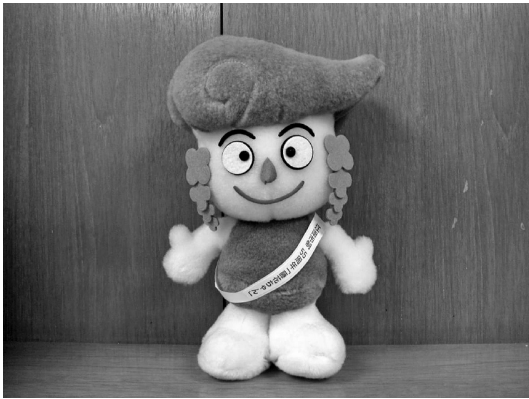


写真 15 藤花ちゃん



写真 16 藤花ちゃん

焼失したが、江戸初期に蜂須賀小六の後裔である阿波の蜂須賀家によって再建された。1970年に寺域の一部を市に提供、以後公園としての整備が進められ、1985年に現在の曼陀羅寺公園が完成した。園内には約60本の藤が植えられており、毎年4月下旬～5月にかけて藤まつりが開かれ、現時点での江南市の観光の目玉となっている。2011年4月29日（昭和の日）には「江南市縁の7人の戦国武将」と題する戦国武将行列が行われ、武将の扮装をした人たちが藤棚の下を練り歩いた（写真14）。ちなみにその7人とは行列のプラカードの順に、浅野長政・蜂須賀家政・前野将右衛門長康・生駒利豊・生駒親正・織田信忠・織田信雄をさす。行列中には吉乃とその娘の徳姫もいた。

江南市で行われる年中行事の中で、近隣市町村以上の範囲から人が集まり毎年一定の観光客動員数を見込めるものとしてはこの藤まつりに勝るものはなく、市のマスコットキャラクターとしても藤の花をかたどった「藤花ちゃん」（写真15・16）が採用されている。現時点では、江南市の観光資源としてある程度広い社会的認知を得ているものはこの曼陀羅寺・藤まつりに限られると考えてよい。

3、『武功夜話』と歴史展示

前節で見た史跡の多くは『武功夜話』の記述を根拠としており、それぞれのポイントに立てられている説明板も『武功夜話』の記事に従うものが多い。前述のように江南市では市内の史跡めぐりコースとして布袋駅を起点とする「信長・生駒（吉乃）コース」と江南駅を起点とする「蜂須賀・曼陀羅寺コース」を設定しているが、そこで設定されている史跡の多くは『武功夜話』の記事に基づいている。江南市教育委員会作成のパンフレット「戦国武将たちの青春の舞台 江南」に見える解説もほぼ『武功夜話』の記述を踏襲したものである。『武功夜話』の存在が観光の観点から見たときの江南市の特質を強く規定している。

『武功夜話』を含む前野家文書は、1959（昭和34）年の伊勢湾台風の際に江南市内で発見され、『信長公記』等の既存資料にみえる歴史像とは大きく異なった戦国時代像を提供する発見として注目を集めた。しかしながらそれは歴史史料としてみた時決して扱いやすいものではない。『武功夜話』はその伝承の過程や資料的価値に多くの疑問があり、現時点でそれを戦国時代の史実を究明するのに役立つ良質な資料と認めている研究者は決して多くはない。『武功夜話』に対しては偽書説・偽文書説があり、偽書説の中には『武功夜話』の昭和期に入ってか

らの成立を疑うものもある⁸。

これに対して『武功夜話』の資料的価値を積極的に認める研究者も存在するが、それらの多くは『武功夜話』が近代以降の作品ではないことの主張、偽書説・偽文書説の論拠に対する個別的な疑問の提示にとどまっているようである⁹。また『武功夜話』のテキスト自体にも問題が多い。『武功夜話』のテキストとして現時点で最も普及しているのは、吉田蒼生雄『武功夜話（全四巻）』（新人物往来社、1987）で、本稿でも関連する記述については便宜上これに拠っている。ただし松浦武によれば、『武功夜話』の写本は10種ほどあって、新人物往来社版の巻一～六は「できごとに対する忠実性よりも、祖先の顕彰の気配がつよく、かつ昭和期に成立したもの」である六巻本が使用されているため、「この活字本をもとに歴史研究をしようとする努力は、まったく危険」¹⁰とのことである。

このように、『武功夜話』の記述に従って歴史的文化遺産に関する展示を行うことは、現時点ではかなり問題の多いやり方なのは明らかである。しかし同時に『武功夜話』に記されている物語がある種の強烈な魅力に満ちたものであることもまた事実である¹¹。すでに多くの小説・ドラマ等でそのストーリーは採用されており、『武功夜話』の筋立ては既にある種の大衆的基盤を持っているとあってよい¹²。

そして観光資源という視点から見たとき、注目すべきはやはり後者、すなわち『武功夜話』という物語が既に獲得している大衆的基盤ということになるだろう。『武功夜話』関連史跡は、その史実性において現時点では多くの問題を持っている。しかし、すでに社会的影響力を持っているある物語・文学作品の舞台として、学術的な情報を含めた展示を行うなら、生駒屋敷をはじめとする『武功夜話』関連史跡の展示には大いに意味があるのではないかと¹³。

史実性を強調しない形での観光資源化は、『武功夜話』をおとしめるものではない。『武功夜話』はあくまでもまだ学術的な結論の出していない書物なのであって、その一方の立場に偏した展示を行わないことは、将来的なリスクヘッジとしての意味を持つ。展覧会等の一過性の展示と異なり、町を象徴する歴史的文化遺産として学術的価値の確定していない対象を扱う場合、万一その対象に大きな疑問が生じた時には、町が小さいほどその負の効果は大きなものとなる可能性が高い。歴史的文化遺産は一時的な観光客誘導の手段としてではなく、長期的な地域住民の誇りとアイデンティティ形成の一環として意識されるべきものではないか。とすれば、学術的状況に配慮した展示、及び展示説明の継続的更新は、歴史的文化遺産公開の一般的原则と考えられなくてはならないだろう。

4、おわりに―生活都市と文化遺産観光―

前節までに紹介したもの以外、すなわち戦国時代・戦国武将に関連するもの以外の江南市の史跡についても若干ふれておこう。江南市北部の村久野町にある音楽寺は円空仏の十二神将像で知られ、それらは6月に開かれるあじさいまつりの期間中は境内の歴史資料館で拝観可能である（写真17）。円空作の十二神将が全てそろっているのは全国で七カ所のみ、十二神将の背面に円空自筆の神将名が記されているのはこの音楽寺のものだけだという¹⁴。

また近代の尾北地域は繊維関係産業の隆勢もあって大いに栄えた。江南市においても昭和30年代あたりまでは名鉄江南駅・布袋駅近辺の商店街は活気に満ちていたという。『江南市史本文編』には、古老からの聞き書きとして明治・大正期の布袋、大正期の古知野の町の様子が



写真 17 音楽寺



写真 18 新町通・愛栄通



写真 19 映画ロケの記録展示など



写真 20 布袋大仏

記されている。それによれば大正十五年ごろの古知野の商店街は朝七時ごろから夜九時頃まで人影が消えることがないほどにぎやかで、劇場や花柳界もあったということである¹⁵。名鉄江南駅近くの新町通・愛栄通は当時の面影を色濃く残す商店街で、大正時代から続く商店もある。この通りは嵐が主演した『黄色い涙』（2007年公開）、唐沢寿明主演の『二十世紀少年』（2008年公開）といった映画のロケ地にもなっており、街角にロケ時の様子などが展示されている（写真 18・19）。

この他に、布袋駅近くには布袋大仏がある（写真 20）。昭和 29 年（1954）に個人により建立されたものである。住宅地に突如現れる大仏として有名だが、完成当時は周辺には名鉄犬山線が通っただけで、建物はほとんどなかったという。近年一種の珍名所として雑誌などでしばしば紹介されている¹⁶。

本稿で概観してきたように、江南市の観光資源は総じて地味である。『るるぶ』『まっぷる』などのメジャーな旅行ガイドでも江南市がとりあげられる量は非常に少なく、この地域における観光は主要な産業にはなりようがないと言えるだろう。しかしながらこのような地域においては、極端に知名度の高い観光資源・観光施設に依存しないがゆえに、生活空間と観光空間が調和的に共存し得る可能性が生まれてくるのではないだろうか。

国際的・国家的なお墨付きのある観光資源を中核とした地域が観光開発・観光客誘致と地域の生活・自然環境保全との矛盾に苦しんでいる事例がしばしば報告されているように、観光資源の巨大さは必ずしもその地域にとってプラスの効果を生み出すものではない。むしろ小規模

な観光資源を適切につなぐことによって、生活都市を支える一要素としての観光を構想することの方が、日本の多くの中小規模の都市にとってより適切な課題として設定し得るのではないか。それは、地域おこしの起爆剤として観光をとらえるのではなく、地域住民の日常生活に埋め込まれたさまざまな要素を観光という枠組みを通して再編成することを意味する。

マス・ツーリズムとは、いわば観光用に特化されたサービス過剰空間に大量の旅客を囲い込むことだった。観光に関するそのようなイメージは現在でも根強くあり、観光を町おこしの起爆剤とみる発想は多くの地方自治体の基調になっている。しかし、観光する側の意識は近年大きな変化を見せつつあり、個別化・多様化が進んでいる。パーソナルな志向に基づいて、いわばマニャックに観光を楽しもうとする傾向は、比較的若い層を中心に急速に強まっているように思われる。そして地球上からフロンティアが消滅しつつある中、多くの知られざる資源を有しながら産業的・観光的開発がなされなかった地方都市は、われわれにとって気楽に訪れることのできる新たな一種のフロンティアたり得るかもしれないのである。

註

- 1 江南市ホームページによれば、2011年7月末現在の江南市の人口は101657人である (<http://www.city.konan.lg.jp/intro.html>)。
- 2 2009年に策定された「江南市都市計画マスタープラン」では、江南市の将来都市像（テーマ）は「水と緑につつまれた 住みたい・住み続けたいまち 江南 ～豊かで暮らしやすい生活都市をめざして～」とされている (<http://www.city.konan.lg.jp/machidukuri/tokei/toshimas.html>: 2011年7月29日閲覧)。
- 3 八幡和郎『戦国大名 県別国盗り物語』（PHP新書、2006）326～330頁。
- 4 武将観光の概要については、中部広域観光推進協議会・編『中部の観光』（交通新聞社、2007）167～170頁。またウェブサイトとしては「武将のふるさと愛知」(<http://www.busho-aichi.jp/>)が武将観光に関する情報を掲載している。
- 5 注4に引いた『中部の観光』には「戦国武将マップ（輩出地・生誕年）候補武将の例」というタイトルの表が掲載されているが（168～170頁）、そこに挙げられている53件のうち江南市のものは1件（生駒親正）のみである。前田栄作『尾張・三河歴史探訪ウォーキング』（メイツ出版、2008）では江南市を「蜂須賀小六正勝が育った江南」として4ページ使って紹介している。しかしこれは例外的な事例である。近年歴史ブームの影響で戦国武将に関連する史跡などをテーマにした観光案内の類が少なからず出版されているが、江南市の史跡に言及しているものは、管見の限り主に地元の著者・出版社によるごく少数の書籍に限られていると言ってよい。また最近出版された長屋良行編著『東海戦国武将ウォーキング』（風媒社、2011）でも江南市への言及はない。
- 6 2コースとも経路は江南市観光協会作成のリーフレット「江南歴史散策道」に拠った。
- 7 以下本稿で使用する写真はすべて柴田により2010年12月から2011年10月までの期間に撮影されたものである。
- 8 近年の代表的なものとして、藤本正行・鈴木真哉『偽書『武功夜話』の研究』（洋泉社y新書、2002）、勝村公『武功夜話異聞』（批評社、2008）を挙げておく。また最近のものとして、鈴木真哉『戦国「常識・非常識」大論争！ 旧説・奇説を信じる方への最後通牒』（洋泉社歴史新書y、2011）の第1章「『武功夜話』を偽書と言って悪いんですか？」も参照。
- 9 近年の代表的なものとして、松浦由紀「戦国軍記『武功夜話』における偽書説について－語彙による年代確定の危うさ－」（『豊田高等工業専門学校紀要』37、2004）、小和田哲男「家伝史料『武功夜話』の研究」（『日本歴史』723、2008）を挙げておく。
- 10 松浦武「武功夜話の写本」（松浦武編集代表『武功夜話 研究と二十一巻本翻刻I』武功夜話研究会、2008）1頁。
- 11 松浦武は「本来『武功夜話』は『平家物語』や『太平記』のように文芸として読むべき性質の作

- 品」であるとする。松浦武「武功夜話の写本」(松浦武編集代表『武功夜話 研究と二十一巻本翻刻 I』武功夜話研究会、2008) 1 頁。
- 12 『武功夜話』に強く依拠した代表的な作品として、本文でもふれた加藤廣『信長の棺』(文春文庫、2008、単行本 2005)・『秀吉の枷』(文春文庫、2009、単行本 2006)の他に、小説としては遠藤周作『男の一生』(文春文庫、1994、単行本 1991)、堺屋太一『秀吉』(文春文庫、1998、単行本 1996)、津本陽『下天は夢か』(角川文庫、2008、単行本 1989)等、テレビドラマではNHK大河ドラマ『秀吉』(1996年放映)等がある。
 - 13 現在の生駒屋敷復元が持つ問題点については、大平晃久「ヘリテージ景観の復元に働く歴史意識 - 愛知県江南市の生駒屋敷を事例に -」(『東海学院大紀要』2、2008)を参照。
 - 14 ただし現時点で音楽寺にあるのは戌像を除く十一体のみで、残りの一体は安城市の長福寺に所蔵されているという。小島悌次「扶桑町・正覚寺及び江南市・音楽寺の円空作十二神将」(『愛知県史研究』15、2011) 122・123 頁。
 - 15 江南市教育委員会・江南市史編さん委員会編『江南市史 本文篇』(愛知県江南市発行、2001) 591～596 頁。
 - 16 『ワンダー JAPAN 日本の不思議な《異空間》500』(三オブックス、2010) 95 頁、坂原弘康『大仏をめぐる』(イースト・プレス、2011) 118～121 頁等。